

くまにち 論壇



恵泉女学園大学長

大日向 雅美

おおひなた・まさみ 発達心理学。「母性愛神話の罠」「女性の一生」「子育て・孫育ての落とし穴」など著書多数。

このたびの熊本での地震の報道に接し、胸つぶれる思いである。10年前の地震、さらにその4年後の大洪水の記憶もよみがえる。東京にいて直接の支援に駆けつけることもできない自分の非力さを痛感する。

酷暑の中、厳しい避難生活を強いられている熊本の方々を思うと、言葉が失うばかりである。とりわけ心配されることの一つが子どもたちだ。どれほど怖い思いをしたことだろう。心に傷を負っていないか、ご家族の不安はいかばかりかと思う。

災害のたびに胸に浮かぶこの思いとともに、アメリカの詩人・ドロシー・ロー・ノルトの詩『子ども』が思い出される。つらい経験が子どもの心をむしばむ様がつづられた後、激励や称賛を受け、寛容に出会い、安心を経験することで、子どもの心はすこやかに育まれることが描かれている。この詩を読むたび、子どもはただ守られるだけの存在ではないことを思う。詩人の子どもを思う心の底流に、その育つ力への信頼と存在へのリスペクトが流れていることを感じるからだ。

日本社会が古来、子どもを慈しんできたことは、人々に久しく愛唱され続けてきた万葉集の山上憶良の歌にもうかがわれる。しかし、いつし

子どもの心を見つめたい

か、子どもを「大切にすること」が「保護に偏ること」へと傾いてきたことはないだろうか。

以前、南米の高地で暮らす家族の映像を見たことがある。3、4歳の男の子が母親と共に山奥に入り、枯れ木の収集を手伝っていた。一日の仕事を終えて帰路をたどっている時、母親から「今日はおまえがいてくれて、助かったよ」という言葉をかけられる。その時の彼の輝くような笑顔が忘れられない。子どもは大好きな家族の役に立ちたい、家族の大切な一員として認められたいと願っている。暮らしの苦楽を分かちあうことで、親は子どもを尊重し、子どももまた親のその心に応えて育っていくことを考えさせられた。

苦しくつらい状況に置かれた時、子どもにそれを知らせたくない願うのは親心の常であろう。しかし、知らせないことだけが子どもを守ることは限らない。2011年3月11日に起きた東日本大震災の時、押し寄せる津波の映像をテレビで見たという、当時幼児だった子が「あれを見て良かった。地震の時はいち早く高い所に避難しなくてはいけない」と友だちと話し合っている」と語ってくれた。

言葉の理解がある程度進み、言葉

を通して考え、コミュニケーションが可能となる年長児以降は、年齢の限界は十分に考慮しつつ、苦楽を分かち合う者同士としての「子ども観」も大切にしたいと思う。

もちろん3歳前後までの幼い頃は、大人に守られる安心感は欠かせない。前記の詩『子ども』の最後は「かわいがられ、抱きしめられた子どもは、世界中の愛情を感じ取ることをおぼえる」と結ばれている。その通りとつなずきつつも、ある懸念が頭をもたげる。厳しい環境に置かれている親が、果たしてどこまで子どもを心から抱きしめる余裕を持てるのか、という点である。

人が人として自らを高め、自分らしく生きていく「自己実現欲求」に至るまでの過程を提示したマズローの「欲求5段階説」の基本は、食事や睡眠など生命維持のための「生理的欲求」と、健康で安定した生活のための経済や環境を求める「安全欲求」が充足されることにある。被災地の方々に、まずこの欲求が保障されるのが急務であることは声を大にして訴えたい。特に、子どもたちを守るために、まず子どもの傍らにいる親たちへの保障を忘れてはならない。

さらに他者とのかわりの中で孤独から救われ、心身ともに居場所が確保される「社会的欲求」と「承認欲求」も大切である。人は不安な時こそ、他者を求める心理状況におかれる。その特性を最大限生かして、今の苦しみや切なさや遠慮なく声に出してほしい、不安を分かちあえる相手を見つけてほしい。

一日も早く元の暮らしに戻るよう日本中が祈っていることを覚えていていただきたい。その祈りの中に私もいる。